イザベラ・バード『日本奥地紀行』にみる英米宣教団の女性たち

大　野　純　子

はじめに

旅行作家イザベラ・バードにとって、日本在住の宣教師らの活躍を著書に記すことは重要なポイントであった。彼女はカトリックとロシア正教会には近づかなかったが、英米の宣教団には積極的に取材を試みている。本稿は、バードが『日本奥地紀行』に記述した英米の宣教団の女性に注目し、彼女が書いたことの他に、書かなかったことの理由も探った。

バードはまず、新潟と函館で英国人の男性宣教師、宣教医の活躍ぶりを詳細に記している。次の居留地神戸で米国人の女性宣教師に焦点を当てれば、英と米、男性と女性との比較対照になり、バランスがとれるが、彼女はそうはしなかった。バードは記述のアンバランスを恐れない人間なのである。

『日本奥地紀行』の引用にあたっては、金坂清則訳の完訳版１～４巻を用い、引用部分の巻数、ページは「完３－21」のように記した。原著は 1880 年ジョン・マレー社版の電子版を用いた。また、「伝道」「宣教」の用語の使い分けは、可能な限り「宣教」に統一したが、すでに定着している「農村伝道」などの語はそのまま使用した。

１．アメリカン・ボードの独身女性宣教師

１．１　米国の自負心とアメリカン・ボード

ヨーロッパの伝統ある国々は米国の国力が増してきても、この国を手本に

しようとは間違っても思わなかった。1860 年代以降、米国人は自国について「英国のように植民地からの搾取で発展した国ではなく、奴隷制度も廃止され、世界のリーダー国となるにふさわしい経済的・道徳的要件を完全に備えた」と自負心を抱くようになった。そしてその実現の手段として、キリスト教宣教に強い義務感を抱くようになった。超党派で設立された海外宣教団体アメリカン・ボード（以下、ボードと記述する）はインドを皮切りに世界各地で宣教活動をし、失敗と成功の経験からさまざまなノウハウを学んでいった。19 世紀後半から急速に国力をつけた日本を、米国は「アジアで見込みのある優秀な学生」とみなすようになった。米国民が教会への献金という形で日本に「文明国になるための奨学金」を与えたのは自然な流れである。

ボードはすでに日本に進出している他の教会の事情を考慮して横浜・東京を避け、1869（明治 2）年に神戸にその拠点を置き、人材と経費を注ぎ込み始めた。ボードにとって幸運だったのは、当時の兵庫県県令神田孝平が開成所頭取も務めた洋学者で、開明的な官僚であったことだ。また、隣接する三田藩（さんだ）の元城主、当時の三田藩知事である九鬼隆義も同様に開明的な人物であり、そのために彼の元家臣、あるいは庶民も恐れることなく宣教師に近づき、西洋の知識を学ぼうとしていた。

1．2　独身女性宣教師への期待

従来、宣教団の女性といえば、プロテスタントではほぼ男性宣教師の妻に限られていた。妻たちの第一の務めは一夫一妻の、愛によって結ばれた家庭を築き、現地の異教徒にそれを見せることであった。しかし、異国での家事と育児の負担は非常に重く、また妊娠出産による死も避けられない時代だったので、ボードは妻たちの外での宣教活動にあまり期待するわけにはいかなかった。しかし、1866 年に N.G. クラークがボードの海外通信担当幹事に就任してから、女性派遣の方針が変わった。独身女性宣教師のメリットは男性宣教師より人件費がかからないこと、本人に家庭経営、育児の負担がないので宣教活動に集中できること、なおかつ現地の女性と接触しやすい点にある。バードが初来日した 1878（明治 11）年前後は、独身女性宣教師の海外派遣の激増が始まった時期であった。

ボードは過去に宣教団が経営するインドの学校で多くの期待外れを味わった。大半の生徒が英語だけを学び、卒業してからは学校からも教会からも離れていったのである。そのため、ボードは学校経営への投資には多少懐疑的なところもあった。しかし、速成で行われた宣教とその受容は持続しないことがある。たとえば、日本でキリスト教的環境をまったく経験していない既婚男性が、特定の宣教師の影響を受けて、ついに受洗したとする。すると、当時なら妻は一般的には否応なしに受洗する。そして子どもたちも受洗する。代替わりがあると、子どもや孫の世代でいつのまにか仏式の葬儀が復活する。先祖の墓や位牌をどう扱うかという問題も常にあった。そういう家庭で二代にわたってミッション・スクールに通った子どもが出ると、信仰が引き継がれやすい。当時の米国では自由主義神学の影響で、たとえば学校という集団の中でゆっくりと育まれたキリスト教的環境の中で自然に受洗することが重要であるという認識が生まれていた。それには長い時間が必要になるが、受洗者の質と量は双方とも重視すべきだった。

多くのミッション・スクールの来日女性宣教師は、生徒の将来の結婚相手にまで事前に気を配り、できることならクリスチャンの男性と結婚させたいと望んだが、もともと日本人男性の信者数が多くないので、その望みはほとんど叶わなかった。それでも、婚約時に女性が相手を説得して、とうとう男性が入信した例もあった。そこに生まれた子どもは幼少時から自然にキリスト教に親しみ、その精神を身につけるだろうと宣教師は喜んだ。

1．3　函館を「ジブラルタルに似ている」と言えること

幕末から明治にかけて函館を訪れた西洋人のほとんどは、船が函館に近づくと一様に「ジブラルタルのようだ」と感想をもらす。バード来函の3年後に函館を訪れた米国人女性宣教師 M.A. ホルブルック[1] も函館山を見て同様の感想を記している。当時、スペインにあるジブラルタルを実際に見たことのある米国人は、ヨーロッパ人と比較するとごく少数だった。彼女は学校で習った知識があるからこう言えたのだ。

バードも 1878（明治 11）年 8 月 7 日に海から函館山を臨んだときに「ジブラルタルのような岩の岬（完 2 － 246）」と記している。女性であるバー

ドはさすがに函館の持つ戦略的地勢や、植民地にした場合の有用性については言及していない。当時、ヨーロッパの女性がその外に出る場合は領事館関係者等の公人、お雇い外国人、商人、宣教師等である夫または父の仕事に伴うのが一般的で、赴任先へのルートなどを心配する必要はなかった。したがって地図も読めない。バードのように自分で旅のルートを決める女性は例外的だった。バードは学校と名のつく所に通ったことはなかったが、大人になってから独学で本を読み、特に博物学に関することは父親、あるいは伝手を求めて「女性にそういうことを教えてやってもよい」と言ってくれる男性に頼んで話を聞き、知識を身につけたのである。一方、米国ではホルブルックのようなフィメール・セミナリー出身の女性なら個人的手段をとらずとも、世界地理、世界史、科学的諸科目を学校で学んでいた。

1．4　どのような人が女性宣教師になったのか

フィメール・セミナリーは女性の中等教育機関で、現代でいえば高校に当たる。1870 年代の米国ではフィメール・セミナリーはすでに珍しい存在ではなくなり、時代の流れで少しずつ一般化していた。そればかりか一部のセミナリーは高等教育機関である大学にまで昇格しつつあった。英米問わず、少なからぬ男性の知識人が「女性の高等教育は女性の健康、特に生殖機能に害を与える」という危惧を表明していたにもかかわらずである。ホルブルックのような女性宣教師の多くはフィメール・セミナリーを中退もしくは卒業していた。

同時代の英国の寄宿学校はフランス語やマナー、芸術鑑賞などのいわゆるお嬢様教育を施す所だったので、学費がかなりかかった。米国のフィメール・セミナリーは学費、寄宿費用の負担が少なくなるように、寮の清掃や炊事は生徒たちが協力して行った。そのため、牧師や教師の娘でも、何とかフィメール・セミナリーに進むことができた。フィメール・セミナリーでは、一般教養、宗教教育と実学を重視した。米国では家事使用人不足のため、相応の家の主婦でも使用人が雇用できないことがあったからである。

英国では公立学校の設立が遅かったため、ミドル・クラスの働きたい女性は家庭教師、または私塾の教師になる例が多く見られたが、私塾はいつ経営

破綻するかわからないし、家庭教師も子どもが大きくなれば教師は職を失う。彼女たちは常に将来の不安に身をさいなまれていた。

一方、米国では公立、私立を問わず学校教師の口はあった。当時、女性教師の給料は男性の 2/3 程度であった。海外宣教団体は自国内の私立学校よりはるかに安定性が高い。当時の人々にとっては永遠に続く組織と思われていただろう。そして、給料は国内では願うことさえできないほど高い。海外で宣教師を務めれば、自国の弟妹の学費を出したり、老親を養うことは充分に可能だった。

女性宣教師は赴任前のトレーニングは受けていたが、男性宣教師が行う聖書の翻訳、説教はできず、授洗資格もなかった。彼女たちは米国内での教師経験を活かして現地に学校を作り、女子教育から始めた。自国では自分の学校を作るなど考える余地もなかったが、異国ではその実現の可能性も実際にあった。

1．5　女性宣教師の書く報告書とバードの旅行記との違い

宣教師は男女を問わず、ボード宛て、またはウーマンズ・ボード宛てにさまざまな書簡を送った。たとえば、前述の「現地の女子生徒が婚約者を説得してついに相手を入信させた例」などについて教師はいちはやくボードに報告した。

このような報告や「旅行記」のようにまとまったものは会員誌に掲載され、ウーマンズ・ボードの関係者に広く読まれ、部会や勉強会のテキストとして使われることもあった。女性たちはここで宣教活動のみならず、現地の地理、最新の外国事情の知識も吸収した。そしてその効果として、女子ミッション・スクールの役割を再認識し、学校運営のための寄付金を出す気になるのである。

前述のホルブルックの北海道旅行の記録「函館とアイヌ集落」と、バードの『日本奥地紀行』のアイヌに関する記録を比較して、どちらが面白いかと言えば、やはり、バードの方である。バードの記述は量も多く、できる限りの調査に基づいた科学的な記録もあるかと思えば、出会ったアイヌ数人を一個人としても描いている。それまでの西洋人男性の記録は、民族としてのアイヌの全体的把握をしたもののみだった。アイヌとその生活基盤にある自然の描写が一体となっているバードの文章は、質のよい小説を読むようである。

ホルブルックは勤務地においてはもちろん、旅行先においても宣教団という組織の一員であり、バードのように気分に任せて従者から離れ、落馬はもとより、熊に出会いかねない状況を自分から作ることはできない。ホルブルックは札幌も訪れた。当時の札幌では、米国人のお雇い外国人たちが実学を中心としたさまざまな分野で技術指導の指導をしていた。開拓地にまったく新しい町を作るという試みは、同じ開拓の経験を持つ本国の米国人がおおいに興味を持つ話題である。

一方、バードは日本の近代化を見に来たのではなく、“unbeaten tracks”を通ってこそわかる、西洋人の考える「ほんとうの日本」を知りたかった。バードがもし札幌に行っていたら、開拓使はこの著名な旅行作家をおおいに歓待し、札幌の町を誇りを持って案内しただろう。それはバードがもっとも好まないことである。開拓使は函館のユースデン領事の依頼により、すでにバードのためにさまざまな便宜を図ってくれていた。その恩恵を受けながらでは、バードといえども、これまで旅の途上でしてきたような「町の発展を毒舌を持って描写すること」はしにくい。バードはすでに開拓使を例にとって日本の役人仕事の効率の悪さを洗い出し、かつ具体例として函館近郊の七重官園や森（地名）での官の事業の無理と無駄をいくつかあげているのだから、それで充分だろう。バードが初めから札幌に近づかず、札幌の町の形成を担った米国人のお雇い外国人たちの仕事をくさすことがなかったのは賢明だった。

2．男女の社会的地位

2．1　女性宣教師が見た日本の女性

女性宣教師 M.E. キダーは日本の女性を「考えることを期待されたことがない（榎本 1998　p.118）」と評した。後述する E. タルカットは女子生徒に「主体となって神の前に立ちなさい」と言ったが、言われた生徒はさぞ驚いたことだろう。なぜならそれまで一度も主体となったことがなかったし、その心構えも不要だったからである。宣教師ではないが、米国人 A.C. ハーツホン[2)]

が 1893（明治 26）年に来日して初めて津田仙の妻、津田梅子の母である「はつ」に会ったとき、「はつ」は「霊的なレインコートを着ているよう（亀田 2007　p.137）」だと感じた。メソジスト教会の熱心な会員だと聞いたが「多分それほど積極的ではない（同）」とも思った。これは大変な炯眼である。「はつ」の夫、仙は外では開明的でありながら、内では明治期の家長らしさも意外と保っていた。「はつ」は教養ある士族の出身で、仙によく仕え、当時の立派な女性の一人であった。彼女は教会の仕事を熱心にしていたが、それは夫がしているからであり、彼女の内から発した個人的な回心や魂の希求から来た行動ではなかった。そのような既婚女性に宣教するより、学校で人生経験の少ない少女に少しずつ宗教教育を施すほうが、宣教師は確実な成果を感じることができるという考えも一理ある。そして、日本の女子教育はほとんど手つかずであり、政府も世間もそれほど注目していなかった。そのため、ミッション・スクールは比較的抵抗を受けずに日本社会に入り込むことができた。

２．２　キリスト教における男女の位置づけ

米国の女性宣教師から見ると、アジアの女性は虐げられた哀れな存在であった。彼らが一番あきれたのは妻妾同居の慣習である。バードも大阪の女性宣教師の伝手で、高級官吏の家を訪ね、興味津々で妻と妾の様子を感情を交えず描写している。論評の言葉を抑えたのは紹介者への配慮だろう。宣教師は、日本では親が娘の結婚相手を決めてしまうことにも軽蔑の気持ちを持っていた。お雇い外国人の娘で、16 歳のアメリカ人クララ・ホイットニーは、1876（明治 9）年 8 月 24 日の日記に、日本人女性は親が決めた相手に嫁がなくてはならないこと、男性について何も知る機会を持てずにいきなり結婚すること、一方、男性は既婚女性には気軽に話しかけてくるため、トラブルになることがあると綴り、

> アメリカの少女たちは、すべての点で対等に男性と交際していて、男性の人格を見抜く目を持っているから、自分で選ぶことができるのだ。私はアメリカ人に生まれたことを心からありがたいと思う。キリスト教の上に築かれた栄光あるわが国よ、万歳！　（ホイットニー　1976 上 p.117）

と、続けている。現代から見ると当時の米国での事実とはかなり異なるという印象は受けるが、それでも英国と比べてさえ、米国の女性には多少の自由があった。

しかし、キリスト教でははっきりと女性を劣った性と規定し、女性の仕事は「男性を助けること」と定めていた。それは、たとえばボードの男女宣教師の給与にも表れている。伊藤 2010 に珍しい資料が紹介されている。それは、神戸でボードの事務担当者の立場にあった D.C. ジェンクスによる「1877 年度分の日本ミッション歳出割り当て一覧」（p.34）[3] という書類である。1876（明治 9）年に書かれたその書類には、次年度の宣教師の一年分の給与が男女別に氏名を掲げて書き込まれている。男性全 11 名のうち、給与が一番高いのは J.D. デイヴィスと W. テイラー医師両人で 1,300 ドル、まだ滞日期間が少ない D.W. ラーネッドが 1,000 ドル等、100 ドルを単位にある程度の差異がある。既婚の男性宣教師の場合、妻の働きとして男性宣教師の約半額の給与が含まれている。

一方、女性のほうは 8 名の名があげられている。この中でもっとも滞日期間が長く、また宣教上の貢献もおおいにあったタルカットと J.E. ダッドレーから、滞日一年未満の A.J. スタークウェザー、両親の介護をしているジュリア・ギューリックに至るまで全員が一律 500 ドルである。現代でいえば、アルバイトの時給が一律であるかのようだ。このことをとってみても、男女宣教師に対する扱いの違いがわかるだろう。

バード初来日後、約 10 年を経てから、ボードの大阪ステーションで地方宣教にめざましい成果を上げていた女性宣教師 A.M. コルビーが、ウーマンズ・ボードの担当者あてに「女性宣教師の給料が男性より低いために、日本人から受けている敬意を損ないはしないか」という懸念と、「同じ仕事をしていても女性の給料が低いこと」に対する怒りを表明した（宮地 2002 p.58）。

３．英米宣教団の女性

３．１　バードが東北・北海道の旅で会った宣教師夫人

バードが神戸に行く前の東北・北海道旅行の際、宿泊などで世話になったのは新潟のファイソン夫人と、函館のデニング夫人の２名である。ファイソン夫人に関してバードは、夫と共に模範となるような「高潔なキリスト教徒の家庭」を運営し、「神の前ではみな平等である」というキリストの教えを実践し、使用人にも思いやりを持って公平に接していると述べている。また、宣教活動としては日本語を習得し、近隣の日本人女性と親しい関係を築き、バイブル・クラスを開催していることも書き添えている。これが宣教師夫人に期待された姿である。

次に函館で出会ったのはデニング夫人とウィリアムズ夫人だが、バードは両人の存在さえ書き残していない。ウィリアムズ夫人について言及していないのは公にできない理由があったと思われる（大野 2018　p.98）。しかし、牧師館に宿泊し、長く世話になったデニング夫人について何一つ書かないというのは不自然である。夫人はバードに申し分のない洋風の部屋を提供した。バードは「函館がとても楽しいということもあって」、アイヌ集落平取（びらとり）行きの「準備も整えてしまったのに、出発を一日延ばしにしている（完３－39）」と書いている。主婦のもてなしがあまりに悪ければ、バードはこうは書かないだろう。函館に着いた嵐の早朝、突然訪れたバードを迎えてくれたのも、また、平取から泥だらけの服で戻ったバードを迎えてくれたのも夫人である。

３．２　宣教師 O.H. ギューリック夫人アン

バードは関西で京都、奈良、伊勢などの旅の前後に神戸のギューリック夫妻の家に滞在し、合計で１か月半ほど世話になった。最後に大阪から神戸に戻った後の約一か月、ギューリック家に居続けたのは、よほどそこが居心地がよく、原稿の下書きも捗ったからなのだろう。

夫人アンとは泊まりがけで奈良、伊勢に旅行をし、近郊では三田（さんだ）に出向いた。彼女は物事をよい方に考える、気持ちのよい人物で、バードは「旅の友

にふさわしい」と評している。彼女は神戸に来る前は、大阪の川口居留地で子どもたちに英語を教えていたが、独身の女性宣教師が来ると、それを彼女たちに引き渡した。来日前はハワイで女学校の校長を務めていた。

バードはアンと長時間共に行動したので、小旅行中の彼女の言動のエピソードも綴っている。奈良県三輪の宿の女将やその娘、女中たちが、アンとバードが顎まで来る洋服を着ていることに驚いた。そこでアンは「帯のところまではだけるような着物の着方は、女性らしさや『品行方正さ』に欠けるように思われます（完 4 － 115）」と言った。バードはそこで筆を止めず、女将らがアンのその発言に驚いただけでなく、後から部屋に女性が入ってくるたびに、「変な外国人の考え方を繰り返し伝えた（完 4 － 115）」と記述している。

アンとしては、ちょっとした啓蒙をしたつもりなのであろう。ハワイに赴任した女性宣教師たちは現地の女性が肌を見せてフラを踊ったりする風習に嫌悪感を抱き、必死にこの「悪習」をやめさせようとした。そして自分たちはどんな気候であろうとも、高い衿と長袖のドレスを着続けた。しかし、西洋人女性から注意を受けた日本あるいはハワイの女性たちが、イブニングドレス姿で肩やデコルテを露わにした白人女性の絵を見たら、どう感じたことだろう。

バードはもう一つ、アンの「啓蒙」が役に立たなかった例を記している。ある宿でアンは、自分たちが雇っている人力車夫と宿の主人にキリスト教の重要な点について話してやった。一夜明けての彼らの感想は、自分たちがキリスト教を信じることになれば「あなた方のお国に行かんならんですかの（完 4 － 128）」という的外れなもので、アンの意図はまったく伝わっていなかったことが判明した。この二つの件についてバードは注意深く、自分の感想は述べていない。しかし、読者は宣教団の一員としてのアンの実力がわかってしまうのである。バードとしては、アンがあくまで男性宣教師のアシスタントである宣教師夫人なので、このエピソードを書けたのだろう。

3．3　1878（明治 11）年時点でのタルカットとダッドレーの成果

ここで、ボードの女性宣教師が実際にどんな成果を収めたかについて、神

戸のタルカットとダッドレーを例にとって述べたい。彼女たちはボードが日本に初めて派遣した女性宣教師である。バードは両人の名前は出していない。

バードは神戸に着いてすぐ、女学校（ホーム）で軽食をとった。この時、来日5年半になるタルカットとダッドレー、それから来日2年半の女性宣教師 M.J. バロウズの3人に会ったと思われるが、バードはごく簡単に「三人［の女性］は流暢に日本語を話し、学校外での伝道活動にも頑張っている。神戸だけではなく遠くの村々でも伝道し、女性のための集会を開いているのである（完4－69）」と述べたのみで、その後はいっさい3人に関する記述はない。

タルカット、ダッドレーは1873（明治6）年、それぞれ37歳、32歳の時に来日した。タルカットは州立師範学校、ダッドレーはロックフォード・セミナリーを卒業し、それぞれ国内での教師経験と家庭内での長期間の看護経験がある。ボードもウーマンズ・ボードも女性宣教師を仕立てて送り出すことに大変な労力と経費をかけている。両人はその期待を裏切らず、独身のまま、じっくり落ち着いて仕事に打ち込んだ。

彼女たちは来日直後は日本語の習得に努めつつ、男性宣教師の開いた宇治野村の英語学校を手伝い、子どもたちの英語塾も設け、のちにそれを女子塾として発展させていった。また、同時に成人向けバイブル・クラスを設け、積極的に老若男女の日本人と接した。バードもこのクラスを見学している。バードの記述によれば、「そこには男性四六人と女性十二人が出席しており、その中にはかなり年配の人がいた（完4－69）」という。

バイブル・クラスの進め方は、上から下に教えを垂れるという形式ではなく、集まった人が順番に聖書の数節を音読し、その後自分の考えを述べるという、いかにも米国的、プロテスタント的な進め方であった。バードは米国での滞在経験が2回もあったが、それでもこのやり方に多少意外な感じがしただろう。日本人のやりとりを聞いていると、あるときは笑い声さえ起きた。バードは「日本人は最初から聖書の内容に畏敬の念を持ち、盲従しようとしているわけではない。自分たちのように幼少期からキリスト教に親しんできた人間とは違うのだ」という認識を新たにした。このように自由な雰囲気で行われるクラスを上手にコントロールすることは簡単ではない。その場

にいる男女の宣教師、宣教師夫人は常に緊張がとけないだろう。

タルカット、ダッドレーの宣教活動の特徴の一つは、女学校の運営に固執して「私の学校」を作ろうとしなかったことである。そして、男性宣教師らと協力して、ボード本部からの送金に頼らない自給教会の基礎を作り、女学校もできるだけ生徒の学費で運営した。ボード本部のクラークは彼女たちに「費用をかけずに最大の貢献をした」との賞賛を送っている。

タルカットらにとって女子塾は宣教活動の一つにすぎなかったが、彼女たちを慕う日本人女性から娘を託されたりして、学校の仕事量は増える一方だった。1876（明治 9）年にダッドレーの従姉妹にあたる、前述のバロウズが来日した。彼女はフィメール・セミナリーの中でもっとも名高い「マウント・ホリヨーク」を卒業している。その翌年には同校の出身者 M.A. クラークソンが来神した。しかし、学校の運営を巡って、すでに活動している 3 人とクラークソンの間に齟齬が生じた。バードが来神した 1878（明治 11）年 10 月、クラークソンは体調を崩して大阪で休養中だったようだ。

この不和ゆえにタルカットらは学校をクラークソンに委ねて地方宣教に注力する決心がついた。なぜ両人は地方宣教にやりがいを感じたのだろうか。それは教室内で少女たちに教えている時は味わえない喜びがあったためだ。彼女たちは日本人男性の敬意を受け、自国にいた時には思いもよらなかった状況に深い満足感を覚えていたのである。彼女たちと同様の喜びは、すでにアフリカで報告されていた。

3．4　「ビビ・ブワナ」

アフリカを旅する英国のレディ・トラベラー、そして女性宣教師は現地の人々に「サー」と敬称を付けて呼ばれることがあった。彼らにとってその女性は、生活の向上に関する知識を教えてくれたり、男性宣教師から救ってくれたり、また、植民地省との間に入って交渉もしてくれる人であった。彼女たちは現地で「ビビ・ブワナ（女先生）」という特別な存在だった。

タルカットは 1876（明治 9）年 10 月 18 日付のボードへの書簡で「日本人は学識を大層尊びますもので、わたくし共外国人教師は、伝道団の他の婦人方よりもはるかに、最大級の尊敬の念をもって見られております（鈴木・

若山 1979　p.131)」と記している。彼女は 75 歳の時に日本の地で没するまで、多くの日本人を助け、2 回の賜暇休暇の帰国、ハワイ宣教従事の期間を除き、関西・中国地方で宣教活動を続けた。彼女は生涯の後半を主に病院・看護教育に捧げ、日露戦争の時は日本人兵士のみならず、中国人捕虜からも尊敬を受けた。

岡山の慈善事業家、石井十次は彼女の「男性の弟子」の一人である。タルカットが神戸から岡山に活動の本拠を移して以来、彼はタルカットに時には信仰上の悩みを打ち明け、彼が運営する孤児院の財政を彼女からの寄付金で助けてもらうこともあった。彼はタルカットを「タルカツ女教師」「タルカツ氏」と記し、4 年分の日誌だけでも彼女の名を 90 回近く書き残している（石村　2017　p.122)。

３．５　英国人女性宣教師ホア

バードは神戸に来て初めて女性宣教師に会ったわけではない。東京ですでに、バードにより近い立場である同国人、SPG 系の Ladies' Assoiation から派遣されている A.A. ホアにたびたび会っているはずだ。バードは 8 か月にわたる日本滞在中、その 1/4 を東京で過ごしている。彼女が礼拝に行ける環境にありながら日曜礼拝に行かないことは考えられず、基本的には英国領事パークス夫妻と共に、SPG 派遣で領事館付き牧師 A.C. ショーが行う英語による礼拝に出席していたと思われる。ホアはバード初来日の時点では、ショー夫妻と同じ敷地の家に住んでいた。

英国の Ladies' Assoiation は、米国より早く設置された。しかし、米国の女性独身宣教師の来日が前述のように 1870 年代から急増したのに比較して、英国の女性宣教師派遣は盛り上がりを見せなかった。ホアは 1875（明治 8）年に来日し、1897（明治 30）年に離日したので、2 回の賜暇休暇を除くと約 20 年日本にいた。彼女は当時の英国のエリート女性の一人であり、家柄もよく学歴もあり、また、決して気の弱い女性ではない。ところが目立った成果は何一つなく、それどころか彼女自身に関する基本的な資料さえ、ほとんど記録がない。ホアは 20 年間、協働する女性宣教師の仲間もなく、女子孤児院、学校を作りたいという夢も叶えられず、男性宣教師の手伝いをする

傍ら、個人的に孤児の面倒を見たり、東京の名士夫人に英語を教えたりして過ごした。ホアはショーと同時期に来日した男性宣教師 W.B. ライトが 1875（明治 8）年から始めた相州（現神奈川県）宣教も手伝った。当時、東京から相州は丸一日の行程である。ライト夫人が夫と共に来れば、この地の女性にも接することができたのだが、夫人は来日後しばらくして体調不良を訴え、後に夫を残して帰英した。そのために、1882（明治 15）年にはとうとうライト自身も離日し、ライトの後任 A. ロイドが相州宣教を引き継いだ。ホアは引き続きロイドを手伝った。当時の農村の人々から見れば、夫婦ではない西洋人の男女が共に東京を発ったり、または現地で合流して行動することは、同性の日本人信者が付いていても目立ち、充分に不道徳な行為であった。

1885（明治 18）ごろ、ホアは長年行動を共にした日本人女性を連れ、一か月相州で宣教活動をしていた。そして後から来たロイドに、ここ中津では村人は死んだ猫なども食べるのに、こちらが頼んでも鶏一ぴきつぶしてくれない。食べ物を手に入れるのがかなり難しいと話した（名取　1991）。バードと従者のイトーも東北のあちこちで鶏を入手するために苦労している。農村の人々は全国どこでも、毎日卵を生んでくれる鶏を手放すのを嫌っていた。このエピソードは、ホアが相州を何回訪れてもよそ者に過ぎなかったことを示している。

タルカット、ダッドレーも神戸居留地内はともかく、農村に行けば同様の事情があったが、とにかく女性を味方につけることからはじめ、女性の家に泊めてもらい、彼女の伝手を利用して奥へ奥へと進んでいった。実績を上げている彼女たちに対して、男性宣教師は彼女たちを協働者として認め、一目置いた。一方、ホアは上から与えられた職務はこなしたが、彼女自身が農村伝道に価値を認めていたかどうかは不明だ。そして、少なくともこの仕事はタルカット、ダッドレーのように自ら開発した仕事ではなかった。

しかし、ホアは二度の賜暇休暇後もまた日本に戻っている。長い滞日生活の間、何がホアの生きがいだったのか不明である。Ladies' Assoiation の組織は、力と実績のないはかない存在であったばかりでなく、その記録さえ残してくれなかった。ホアが成果を残せなかったのは彼女個人の特質から来るものというより、背後で支える女性組織の脆弱さ、圧倒的な人材不足、男性

宣教師が女性宣教師を単なるヘルプと認識していることが要因である。

バードは会ったはずのホアについて、デニング夫人と同じようにその存在を表す一言さえ書き残さなかった。何かを書き残せば、英国の読者は宣教団の米国人女性と英国人女性の状況に雲泥の差があると気がついてしまうだろう。

3．6　米国人女性宣教師のエンパワーメント

英米の独身女性宣教師派遣は「女性のための女性の仕事」の担い手を作るために始まった。当時の欧米では、女性が男女混合の聴衆の前でまとまった何かを発信すると、非難の嵐にさらされた。彼女たちが本当にしたいことは参政権運動ではないかと警戒する男性も少なくなかった。

それが、海外宣教の場では人手不足を理由に、女性が「女性のための仕事」以外に進出してきた。前述の女性宣教師コルビーは、大阪の事情で自然に女子学校を他の人に任せ、地方宣教をした。彼女は居留地以外の堺に単身住んで宣教活動をしたので、女性宣教師の管理者たる男性宣教師から懸念を抱かれ続けた。しかし、果たした功績が大きかったため、警告やボードへの告げ口もたいした効果をもたらさなかった。

コルビーはクラークに「人口 10 万人の教区を一人で受け持つ『男性の仕事』をしている（宮地 2002 p.51）」と認められたが、コルビーは自分の仕事の進め方は決して自ら望んで展開しているのではなく、大阪の地域の事情により強いられてしているのだと述べ、「火事の現場に駆けつけた消防士は、焼け死のうとしている相手が女だから救う、男だから救わないと、性によって区別していない。また、助ける側の性も問題にされない」と巧妙なたとえを出している（同 p.51）。このコルビーもまた、担当地域の日本人男性から受けている敬意に力を得ていた。米国にいるウーマンズ・ボードの女性たちも、タルカット、ダッドレーの成功から 10 年を経ていることであり、男女を問わず能力のある宣教師の当然の成果だと受けとめただろう。英米双方の女性宣教師派遣団体は常に本部の意向を尊重すべきだったので、表だって男女の分業に異を唱えたりはしなかった。しかし、ウーマンズ・ボードは、現地の女性宣教師の報告の手紙を女性の勉強会の教材に用いることで、まず女性に、女性が男性の分野の仕事ができていることを知らせ、草の根からの変革を始めたのである。

おわりに

バードは医療宣教に関心があり、一方でミッション・スクールには関心が薄かった。京都でも神戸でも一通りの紹介で済ませている。日本最大の居留地横浜、または築地のミッション・スクールで活動している女性宣教師に多くの取材ができたのにそれもしなかった。学校教育のビジョン、カリキュラムなどの重要性など、包括的なことについての知識も少ない。したがって宣教団の女性の仕事についての記述は多くない。

それでも、バードが著書に書き残した神戸でのバイブル・クラス、一般家庭での聖書勉強会の様子などは、宣教師以外の人が書き残した珍しい記録として充分に価値を持つ。宣教師による本部報告はどうしてもその意義や効果をより大きく伝えがちだからである。

彼女のような英国人のレディ・トラベラーたちが、女性の権利に無関心な傾向があることはつとに指摘されている。女性の活躍を願い、社会の改善に取り組むことは、トラベラーという職業の内容と合わなかった。まず、トラベラーは国内に長くはいない。万が一、女性の権利に目覚めたら、その権利獲得のための組織作りやら集会やらで定住が必要になり、旅行がしにくくなる。バードは後年の中国旅行において、女性の纏足の弊害を知ったときも、纏足を問題視している中国在住の英国人女性に協力はしなかった。

バードの旅行は原則的に、伝手を辿って有力者から在外領事や宣教団の本部の紹介状をもらって開始される。男性に不快な思いをさせるのはバードの好むところではない。英国内や旅行先の女性・女児の未来のために犠牲になるつもりはなかった。彼女は世間（男性）に警戒される行動や、広くメディアで非難されて冷笑の対象になる行動を避けようと極力努めていた。

レディー・トラベラーは外国旅行を通して、国内の女性より一個人としての充足を得やすかった。さらに自己実現の成果を出版して、特別な女性として国内でもてはやされる機会さえ与えられていたので、もし、自分の業績が女性の地位改良に役立つのなら、そうしてほしいという程度の関心しか持てなかったのである。

バードは『日本奥地紀行』第 58 報に「キリスト教の見通し」を記してい

る。彼女は、日本における宣教がこれまでも、そして今後もハワイ宣教のような成功への道を歩めないことを認めつつ、それでも、「キリスト教が日本の未来を作り上げていく原動力になるにちがいないとは確信している（完4-162）」と述べ、キリスト教が宗教というよりも生活として受け入れられていくことに希望を持っている。これこそ、宣教団の女性が開拓してきたものだった。

注

1）1852 年生。ワイオミング・セミナリーを卒業後、国内で教師になり、バード初来日と同年の 1878（明治 11）年にメソジスト監督派教会女性海外伝道協会の派遣で来日。築地の海岸女学校の教師、華族女学校の教師を務めた。

2）米国人教育者。津田梅子の 2 回目の米国留学時の友人であり、後に梅子が開いた学校を長期にわたって助けた。

3）この表は次年度の計画として書かれたもので、確実にこの金額が支払われたとは断定できないが、他教派の例を見ればおおよそ信頼できる数字だろう。女性の給与は男性の半額、または 2/3 程度と書かれた複数の文献がある。ここでは、女性宣教師の給与が実績・キャリアに関係なく、すべて一律だったことの実例としてあげた。

参考文献

石井紀子 2002「女性宣教師を通してみる神戸の伝道と教育」『キリスト教史学』56　キリスト教史学会

石村真紀　2017「イライザ・タルカット（Eliza Talcott,1836-1911）の岡山における活動：19 世紀末における在日アメリカ女性宣教師による社会活動理解の試み」『キリスト教社会問題研究』66　同志社人文科学研究所

伊藤豊　2010「アメリカン・ボード日本ミッション関連資料（仮題）の概要について」『山形大学紀要　人文科学』17（1）山形大学

榎本義子　1998「M.E. キダーの教育における異文化融合の試み」『異文化

交流と近代化　京都国際セミナー 1996』松下鈞編「異文化交流と近代化」京都国際セミナー 1996 組織委員会　大空社
大野純子　2018「函館とイザベラ・バード（1)」『大正大学研究紀要』103　大正大学
金坂清則　2014『イザベラ・バードと日本の旅』平凡社
亀田帛子　2007『津田梅子とアナ・C・ハーツホン』双文社出版
小檜山ルイ　1992『アメリカ婦人宣教師　来日の背景とその影響』東京大学出版会
齋藤元子　2006「『地理的知識』の普及と明治期来日アメリカ人女性宣教師」『お茶の水地理』2006 年 3 月 20 日　お茶の水女子大学
白井尭子　1999『福沢諭吉と宣教師たち　知られざる明治期の日英関係』未莱社
鈴木恒彌　若山晴子 1979「タルカット書簡―訳および註（二)」『神戸女学院大学論集』25-3　神戸女学院大学
名取多嘉雄　1991「ウイリアム・ライトの相州伝道 その 4」『紀要』23　立教女学院短期大学
バード、イザベラ　2012 ～ 2013『完訳　日本奥地紀行』vol. 1 ～ 4　金坂清則訳注　平凡社
早田萌　2019「日本における女子教育の開花と発展」『明治日本とキリスト教―蒔かれた種』宮川由衣編　西南学院大学博物館 花乱社
ホイットニー、クララ　1976『クララの明治日記』（上）一又民子訳　講談社
宮地ひとみ　2002「女性宣教師を通してみる大阪の伝道と教育－ステーションの伝道方針と女性の役割変化－」『キリスト教史学』56　キリスト教史学会
『七一雑報』3 巻 51 号 [1878] 1988　明治 11 年 12 月 20 日　不二出版
Bird, Isabella L.　1880 “Unbeaten Tracks in Japan: An Account of Travels in the Interior Including Visits to the Aborigines of Yezo and the Shrines of Nikkô and Isé” vol.1,2　John Murray , London